屋久杉等海上輸送施設遺構
官船の運航と戦争被害

【3】

鹿児島森林管理署　鹿児島大学森林政策学研究室

官船

昭和10年度～59年度の約50年の間に、景山丸・開聞丸・南嶺丸・錦嶺丸の計４隻の鹿児島営林署所有の木材運搬船が運行された。４隻は、主に２隻体制（景山丸・開聞丸、景山丸・南嶺丸、景山丸・錦嶺丸）で運用された。

写真-16　景山丸（鋼船）

写真-17　開聞丸（木造船）（写真は井上日呂登氏所蔵）

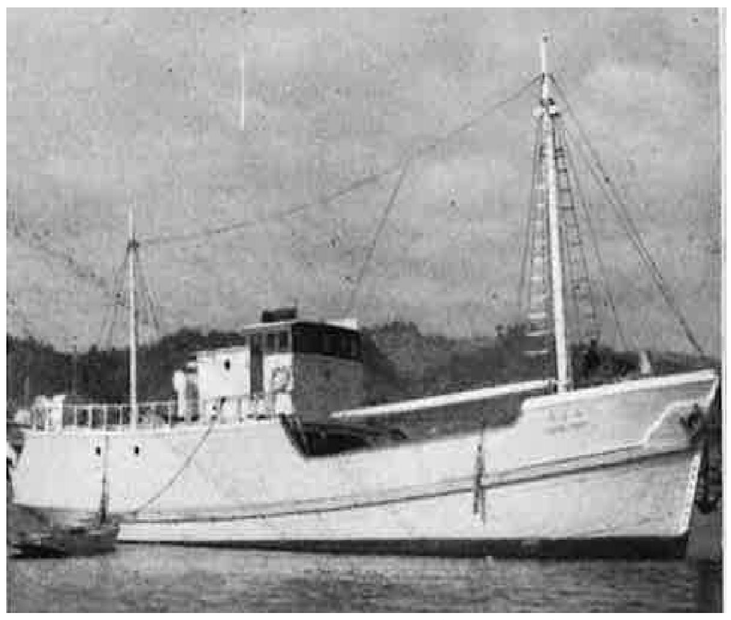

写真-18　南嶺丸（木造船）

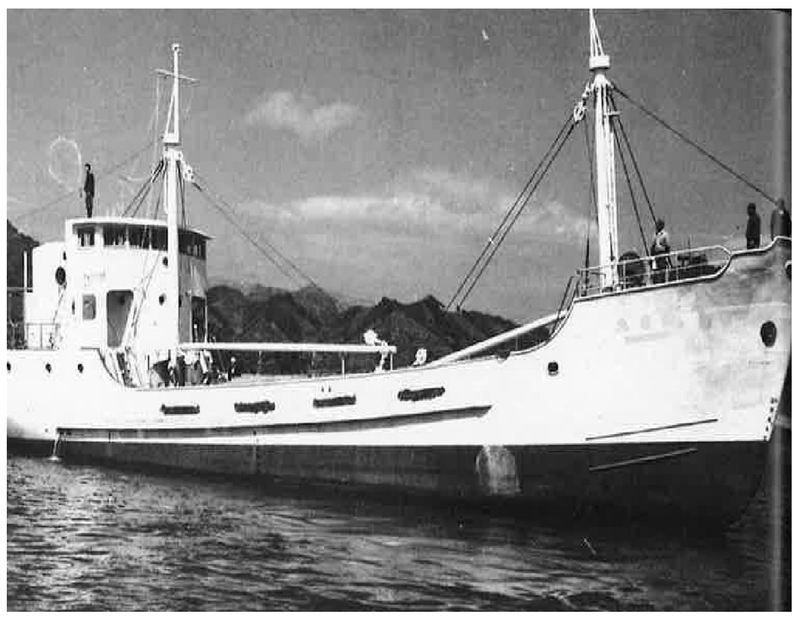

写真-19　錦嶺丸（鋼船）

林業部局が木材運搬の専用船を建造・運用した事例は、陸上交通が未発達の時代の木材運送の歴史を語る上でも重要なものであり、また屋久杉ほかの屋久島からの林産物の海運の歴史を語る上でも重要なものである。
他県においても官船が利用されることはあったがこの4隻は国が運行する官船として規模はかなり大きいものであった。

景山丸：昭和10年12月23日進水、昭和11年2月26日就航式。主に鹿児島貯木場～屋久島・大隅半島間で素材・木炭を運搬。輸送コストの上昇に伴い昭和46年9月8日に用途廃止。

開聞丸：昭和14年2月2日進水、昭和14年3月就航。主に鹿児島貯木場、屋久島、大隅半島間で素材・木炭を運送したほか、長崎、大阪、北海道への木炭輸送に従事したこともある。昭和20年3月16日、屋久島に向け鹿児島貯木場を出港後、米機動部隊の航空攻撃を受けて沈没。昭和26年に慰霊祭と慰霊碑の序幕が行われた。

南嶺丸：開聞丸の代船として建造。木造船で木船建造に要した木材は361㎥で、ケヤキ、スギ、マツ、ヒノキが用いられた。昭和23年12月16日進水、昭和24年2月15日就航式。鹿児島貯木場～屋久島・大隅半島間で運行。後継船の錦嶺丸の完成により、昭和34年1月に運用廃止。

錦嶺丸：南嶺丸の後継船として建造。昭和34年1月進水、同年3月15日竣工。主に鹿児島～屋久島間で運用。船体規模は景山丸と同程度であり、機関はディーゼルエンジン250馬力と４隻の中で最も出力が大きく優速であり、景山丸が鹿児島～屋久島間の所要時間が空荷で10時間に対し、錦嶺丸は８時間であった。屋久島での伐採量及び輸送量の減少により、昭和60年4月9日用途廃止。

開聞丸慰霊碑

開聞丸沈没時の状況

昭和20年3月16日、屋久島に向けて鹿児島貯木場を出航。
安房停泊中、4月からの沖縄戦を前に空母12隻、航空機1400機他からなる米機動部隊が3月18日に鹿児島市ほかを、19日には呉軍港ほか各地を空襲。これに対し日本陸海軍は航空機約400機をもって反撃（九州沖航空戦）。22日には戦闘が止み、23日に大本営は総合戦果を発表。空母5隻他を撃沈、米機動部隊はウルシーに退却と判断。
木炭を積載し安房港に待機していた開聞丸は25日6時に出航し、同日昼に種子島西之表住吉部落沖を航海していた際、日本近海に留まっていた米機動部隊による航空攻撃を受け開聞丸は撃沈。9名の乗組員の他、屋久島からの便乗者8名、計17名が犠牲となった。

慰霊碑の建立

昭和26年12月20日、鹿児島営林署は鹿児島貯木場で殉職者の慰霊祭を催し、慰霊碑の序幕を行った。慰霊碑は鹿児島営林署玄関前に設置され、令和元年に鹿児島営林署が貯木場内で移転した際、慰霊碑も移転先の署構内に移され今に至る。

写真-20（左）・21（右）　鹿児島森林管理署に保存されている開聞丸慰霊碑

無線局

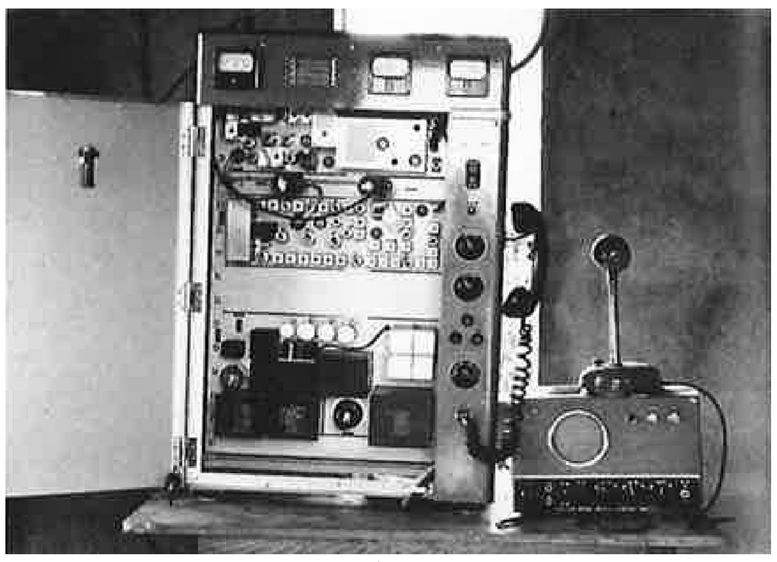

写真-22
鹿児島貯木場運輸無線局（昭和26年）

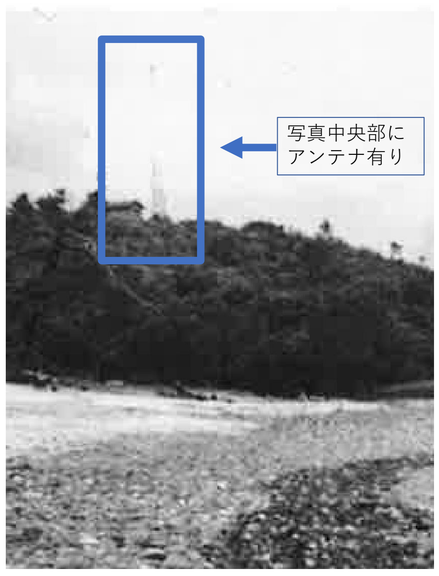

写真-23
安房無線局（昭和26年）

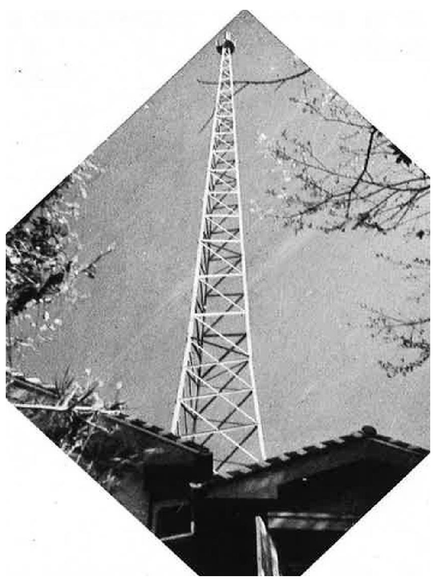

写真-24
種子島無線局

昭和28年3月31日、景山丸と南嶺丸との連絡用に鹿児島貯木場（運輸無線局）及び大根占営林署（花瀬無線局）下屋久営林署（安房無線局）種子島営林署（種子島無線局を新設。送受信機及び高さ30mの鉄塔1基が設置され、景山丸及び南嶺丸にも送受信機が設置された。
南嶺丸廃船後、送受信機は錦嶺丸に引き継がれた。この超短波無線装置は、昭和48年2月6日まで使用された。